

(原著論文)

身体教育のメディアとしての「運動」

—— ハンス・レンクの「達成としての運動」概念を手がかりに ——

久保正秋*¹

Movements as a Medium of Instruction in Physical Education

—— Based on Hans Lenk's Concept of "Movements as Proper Achievements" ——

by

Masaaki KUBO

論文掲載誌

体育・スポーツ哲学研究 (2006), Vol.28 No.2, pp. 77～84.

論文の構成

1. 「身体」のメディア的様相と「運動」
2. 「達成」と「運動」
 - 1) 広い意味での「達成」(日常の運動)
 - 2) 狭い意味での「達成」(スポーツ運動)
3. 教育の「メディア」としての「運動」
 - 1) 教育の「メディア」としての「スポーツ運動」とその限界
 - 2) 教育の「メディア」としての「日常の運動 (広い意味での達成)」
4. 「日常の運動 (広い意味での達成)」の身体教育の「メディア」としての根拠

研究の概要

本研究は、ハンス・レンクの「固有な達成としての運動」という概念にもとづいて、身体教育のメディアとしての「運動」を考察することを目的としている。そのために最初に、ハンス・レンクの「身体メディア的様相」と「身体運動」との関連を明らかにした。次に「達成」としての「運動」を論じた。さらに、身体教育のメディアとしての「日常の運動」、および「スポーツ運動」を論じた。最終的に、

* 1 東海大学体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科

「日常の運動」の身体教育のメディアとしての根拠を考察した。

今回の検討の結果は以下の通りである

1. レンクは「身体はメディアであるとともに、行為の中心としてある」と述べる。さらに構成する媒体と存在の構成としての身体を論じ、「運動性のパフォーマンスがなければ、活動も、生活も、そしてどんな種類の表現の可能性もない」と述べる。つまり、身体は「運動」することによってその存在を構成するのである。

2. レンクは、文化的に浸透され、教育されたフレームワークの中の、固有な達成としての運動を論じ、「新しい、困難な、目標志向した運動の学習は、自分自身の身体とその周りの世界を支配することを伴い、自己-表現、自己-描写、そして自己-確認の新しい別形を媒介することを伴う」と述べる。このように身体運動は、世界に向けてのメディアとしての可能性を持つ。

3. レンクは、「スポーツの運動と行為は日常の運動パターンと区別されなければならない」と述べ、日常の運動は広い意味での達成として理解し得るが、社会的な制度化がなされていないと指摘する。そして、「スポーツ運動は、可能性と表現形式であるのみならず、それらは実際、個々人が世界へと向かい、そしてそれに対処するための特徴的な媒介物である」と結論づけている。しかしながら、スポーツ運動は、競争-志向された社会の中で制度化されるものであり、スポーツ運動は身体教育のメディアから、その運動の結果のための媒介物へと変化する可能性がある。

4. 日常の運動は、競争-志向された社会の中で制度化されておらず、それ故にその運動の結果に左右されない。日常の運動は、理想化された規範パターンでないが故に、多様性を有する。結論として、身体教育における「メディア」としての「日常の運動（広い意味での達成）」は、この運動の結果からの超越と運動の多様性によって基礎づけられるといえる。